【悪徳子爵編】
サキュバスと触手剣士の
搾精百合マイホーム計画 Ep.2



プロローグ
第一章　ギルド嬢からの新しい依頼
第二章　双子の甘檻と、崩壊する武人の盾
第三章　音が漏れない部屋
エピローグ

プロローグ

木漏れ日が、石畳の街道に穏やかな陰影を落としていた。
安宿の淀んだカビ臭さや路地裏の生々しい鉄と精の匂いとは無縁の、どこまでも乾いた風が吹き抜けていく。
街道外れの緩やかな丘陵に差し掛かったところで、ベルゼ・レヴィアは足を止め、背負った大剣の位置を直しながら笑みを浮かべた。
「……見ろ、メア。あの堅牢な石造りの外壁を」
手入れの行き届いた芝生を囲むのは、優にベルゼの背丈を越える厚みのある石壁。鉄格子の門扉の隙間からは白亜を纏った平屋と、色鮮やかな木々が植えられた広大な敷地が覗いている。南向きに大きく取られた硝子窓には、燦々と温かな陽光が注ぎ込んでいた。

「日当たりは申し分ない。これだけ重厚な壁に囲まれていれば、外からの視線も完全に遮断できる。あの広い庭があれば誰に気兼ねすることもなく、素振りや型の鍛錬に打ち込めるぞ」

大剣の重みを手袋越しに確かめながら、頭の中にはすでに整然とした生活の光景が組み上がっていた。

陽光の降り注ぐ中庭で、心ゆくまで大剣を振り抜く己の姿。その傍ら、木陰の寝椅子で、相棒が日記帳を広げて気だるげに微睡んでいる。

防音の施された厚い壁と、外界と隔絶された広い敷地があれば、万が一、忌まわしき深淵の触手が感情の昂ぶりで暴走しようとも、誰かに怪しまれる恐れはない。

「手入れした剣を並べる部屋も作れるし、本棚を置く余白もある。どうだ、メア。これ以上ない理想の家だぞ」

白マントを翻し、豊かな胸元を堂々と張って振り返るベルゼ。

だが、その隣に立つ少女は、だぼついた黒衣のフードを目深に被ったま

ま、冷ややかな瞳で門前の立て札を見つめていた。
「……ベル。理想を語る前に、あそこの看板見てごらんよ」
平坦で、驚くほど抑揚のない声が涼やかな風を切り裂く。
袖口から伸びた細い指先が示していたのは、不動産商会の印が捺された売買案内板だった。

『陽光豊かな丘陵の一軒家（敷地面積：三百坪／高位結界壁完備）
販売価格：金貨八百枚（一括でのお支払い）』

「……き、金貨……八百枚……？」
声が喉の奥で掠れて引き攣った。
八百。金貨、八百枚。

先日の尊厳を粉々に擦り減らしてようやく手に入れた大口の討伐報酬ですら、金貨五枚だったのだ。

あれをまるごと注ぎ込んでも頭金にも満たない。この豪壮な門扉の蝶番ひとつ買い取れるか怪しいという圧倒的な格差。

「メ、メア……？　これは、その……文字の装飾の類とかじゃないのか？　ほら、後ろについている丸い記号は、何かの家紋か魔導刻印の類で……」

「ただのゼロだよ、ベル。見事に真ん丸なゼロが二つ、綺麗に並んでるね」

「ゼロが……多すぎではないか……？」

「現実っていつもゼロが多いんだよ。今のペースで依頼をこなし続けても……そうだね、あと百五十年くらいはあのカビ臭い安宿で、夜毎ギシギシ鳴るベッドに耐える生活が確定かな」

「百五十年……ッ!?」

大剣の柄を握りしめたまま、長身がわずかにぐらりと揺らぐ。

「ひゃ、百五十年など……人間なら二回死んで生まれ変わっても足りない

じゃないか！　あの盗賊どもをどれだけ捕まえれば手が届くというのだ……ッ!?」
「まぁ盗賊を捕まえ続けて八百枚はまず無理でしょ……それが出来たら、むしろ人間達が荒くれすぎじゃない？」
「むしろもっと荒くれてくれた方がいい……」
「治安悪すぎでしょ……」
額の金属バンドを押さえ、青ざめた顔で本気で頭を抱え込むベルゼ。
その生真面目すぎる絶望ぶりを横目に、メアは長いため息をひとつ零すとベルゼの腕を軽く小突いた。
「夢を見るのは自由だけどさ、ベル。夢じゃ宿代も払えないし、固いパンも柔らかくならないんだよ」
「ぐっ……正論で殴るな……っ」
「それにさ」
メアはいつもの気だるげな声音の裏に、底知れぬ艶を滲ませてベルゼを

見上げた。
「あんな大きな家じゃなくても、ベルといっしょにいられれば、私はどこだって退屈しないよ？　……この間の夜みたいに、ちょっと胸を弄っただけで、あんなに甘い声で啼いてくれるならね」
「なっ!?　おまえ……白昼堂々何を言い出すんだこの淫乱……ッ!!」
首筋まで真っ赤に沸騰させ、ベルゼは大剣を抱きしめるようにして飛び退いた。
からかうように薄い唇を吊り上げるメアと、真っ赤な顔で大剣を握り直すベルゼ。手の届かない豪邸の門前、初夏の陽光の下で繰り広げられる、どこまでも噛み合わず、けれど奇妙に温かな二人の時間。
金貨八百枚という圧倒的な数字に打ちひしがれながらも、ベルゼは再び見上げた青空の眩しさに、小さく、誰にも聞こえない溜息をこぼしていった。

第一章　ギルド嬢からの新しい依頼

絶望的な数字の余韻を背中に引きずりながら、二人は冒険者ギルド「グリムホールド支部」の門をくぐった。

昼下がりのギルドホールは、午前中の殺伐とした熱気が幾分和らぎ、安酒の饐えた匂いと肉を炙る煙が気だるげに漂っている。

掲示板の前に立ち尽くし、羊皮紙の端を指先で弾くベルゼの眉間には消えない皺が深く刻まれていた。

「……どう見ても割に合わんな。Cランクに上がったとはいえ、堅実な護衛や魔獣討伐の報酬は金貨数枚から十枚前後。八百枚の壁を崩すには、この手の仕事を何十回、何百回とこなさねばならんぞ」

「んー……地道に働くのって、本当に不毛だよねぇ。どっかに都合よく金

貨の山でも落ちてないかな」
相棒が袖口に顎を埋め、気の抜けたあくびを零した、その時だった。
「あ……メアさん。それと、ベルゼさんも」
背後からかけられたのは、どこか息を呑むような湿り気を帯びた細い声だった。
振り返ったベルゼの目が、カウンター脇に佇む栗色の髪の娘を捉える。
この間、執務机の下でメアの舌先によって限界まで啼かされ、下着を奪われた例の受付嬢だった。
変わらず堅苦しい丸眼鏡はやはり外されたままで、乱れた前髪の隙間から覗く濡れた瞳は、微かな熱を孕んでメアの姿に吸い寄せられている。制服の襟元も、外されたボタンがひとつ戻らぬまま、汗ばんだ白い鎖骨を無防備に晒していた。
「あれ、どうしたの？　また発情しちゃった？」
メアが瞳をとろんと細め、からかうように唇の端を吊り上げる。

そのあけすけな問いかけに、受付嬢の白い頬が一瞬にして耳の裏まで朱に染まった。
「きょ、今日は違いますっ……！」
「……今日は、とはどういうことだ、今日は、とは」
一度女の味を覚えさせられた娘が、その甘美な毒の主を前にして無意識に匂い立たせる湿潤な空気。武人として潔癖でありたいベルゼにとって、二人の間に漂う生々しい情欲の残り香は居心地の悪さ以外の何物でもない。
「……それで、私たちに何か用か？」
「あ、はい……お二人とも、お仕事をお探しですか？」
「うん。割が良くて、なるべく楽なやつ」
「そんなもんがあるか、楽をしようとするな」
即座に切り捨てたベルゼの鋭い視線を受け止めながらも、受付嬢は怯むどころか、周囲の冒険者たちの視線を気にするように細い首をすくめた。

そして、小声で囁くように身を寄せてくる。
「……危険は伴いますけれど、ひとつ、とても条件の良いお仕事があるんです……こちらへどうぞ」
手招きされた先は、ギルドの奥深く、一般の登録者が立ち入ることのない防音の施された小さな相談室だった。
重厚な木扉がカチャリと音を立てて閉ざされ、密室の中にランプの灯火だけが揺らめく。
「すみません……ここなら誰にも聞かれませんので」
「聞かれてはまずいことなのか？」
「ええ……あまり大っぴらにはしたくない内容なんです」
「……どうしてそんな依頼を私たちに持ってきた？　私たちはCランクに上がったばかりの新米冒険者だぞ」
隠しきれない警戒心を滲ませ、ベルゼは低く問い詰める。
すると受付嬢は、手元の書類を抱きしめるように胸元をかばい、潤んだ

瞳を彷徨わせながら、消え入りそうな声で口を開いた。
「……ちょっとした、お礼です」
「お礼、ねぇ……」
メアが猫のように目を細め、意味ありげに喉を鳴らした。
受付嬢は慌てて小さく咳払いをし、言い訳を重ねるように早口で言葉を紡ぐ。
「その……メアさんに、あんな風にいじられてから……なぜか、以前よりもギルドの男性職員や冒険者さんたちから親しく声をかけられることが増えまして。お堅くて近寄りがたい雰囲気が消えたと言いますか、その、自信がついたと言いますか……」
その言葉通り、目の前の受付嬢の佇まいは以前とは明らかに変わっていた。
清楚だったはずの制服のスカート丈は不自然なほど短く詰められ、白く滑らかな太ももが惜しげもなく露わになっている。

メアはその変化を上から下まで値踏みするように舐め回すと、妖しい笑みを深めて受付嬢へと一歩詰め寄った。

「自信がついた、ねぇ？　……ふふっ、単に身体が疼いちゃって、自分から開いちゃってるだけでしょ？　ほら、ここからでも甘い雌の匂いがプンプン漂ってるよ……？　私じゃなくても、男が見たら理性を失くして、そのままカウンターの上に押し倒してむしゃぶりつきたくなるくらい、美味しそうな熟れ方してるもん」

サキュバスならではの毒を含んだ甘い囁きが、防音の密室にねっとりと落ちる。

受付嬢はびくりと肩を跳ねさせると、耳まで赤く染め上げ、耐えかねたように下唇をきゅっと噛み締めた。短くなったスカートの裾をぎゅっと握りしめ、キュッと合わされた内股が、何かを思い出したかのように小刻みに震えている。

（……想像したな、この娘）

男たちに貪られる己の姿を生々しく思い描いてしまったであろうその無防備な反応に、ベルゼは半目になって深々とため息をついた。

一度あんな淫魔に奥底を開拓されてしまえば、身体が勝手に熱を覚えてしまうのも無理はない。

「……メア、からかうのも大概にしろ。それと受付嬢、本題に入ってくれるか？　その『条件の良い仕事』とやらは何だ」

ベルゼが低く咳払いをして促すと、受付嬢はハッと我に返り、机の上に一枚の印章のない羊皮紙をおずおずと滑らせてきた。

「……公の掲示板には決して出せない、特命の裏案件です」

ランプの薄暗がりの中、受付嬢の指先が地図の一角を示した。

「街の東部に大邸宅を構える、とある貴族の御方です。表向きは美術品の収集家を装っていますが、裏で禁制品の密輸や闇取引に深く関わっているという噂があります。ですが、あの御仁は法の網を潜るのが非常に巧みな方で、王国の憲兵が正式に捜査へ踏み切る決定的な証拠が掴めないのです」

「……屋敷に乗り込んでその貴族の首を獲ってこいと？　暗殺紛いの真似なら断るぞ」
「いえ、命を奪う必要はありません」
受付嬢は首を横に振り、声をさらに一段低く潜ませた。
「憲兵に雇われた密偵の潜入捜査の結果、屋敷の地下深くに厳重に施錠された宝物庫があり、そこに他国から密輸された、本来取引を禁じられているいわく付きの美術品が隠されていることが判明しました。お二人に忍び込んでいただき、回収していただきたいのは……その美術品の出所と裏取引の全容を記した、極秘の【鑑定書】です」
「鑑定書だと？」
「はい。美術品そのものを持ち出せばただの窃盗ですが、鑑定書さえ抜いてしまえば、あの貴族はその絵画が本物であると証明できず、裏ルートで売りさばくこともできなくなります。証拠を押さえられた上、売却不能な美術品を抱え込むリスクを考えれば、莫大な罰金を支払ってでも、不正を

自白した方が得だと計算するはず……そういう寸法です」
提示された筋書きに、ベルゼは腕を組んで思案を巡らせた。
単なる略奪や泥棒ではない。悪徳貴族の不正を暴き、逃げ道を塞ぐための証拠奪取。これならば、武人としての魂が完全に穢れるわけではないかもしれない。
「……で、報酬は？」
隣で黙って聞いていたメアが、核心を突くように短く問いかける。
受付嬢は、少し息を呑むと、手元のメモ用紙にサラサラと数字を書き込み、二人へ差し出した。
「ギルドの裏特別予算から、成功報酬として――金貨百五十枚をお支払いします」
「……百、五十……!?」
ベルゼの喉が、引き攣ったように乾いた音を立てた。
先ほど丘の上で見た、あの燦々と陽光が降り注ぐ理想の城。金貨八百枚

という絶望的な数字の前に砕け散りかけた夢が、突如として現実味を帯びて目の前に飛び込んできたのだ。

百五十枚。頭金の二割どころか、一撃で契約へ向けて大きく前進できるだけの破格の巨金。

だが――。

「ふぅん……高すぎるねぇ」

メアが瞳を妖しく細め、ねっとりとした視線で受付嬢を見据えながら鼻を鳴らした。

「なにがだ？」

舞い上がりかけた頭を冷やすようにベルゼが尋ねると、メアは呆れたように小さく肩を竦める。

「屋敷に侵入して鑑定書を取ってくるだけなら、そこまで大きなリスクがあるとは思えないでしょ。相手が凶暴な魔物の巣や武装した盗賊団ならまだしも、ただのお貴族様だよ？　紙切れ一枚盗み出す仕事が金貨百五十枚

に化けるなんて、絶対に何か裏があるって思うのが普通じゃない？」
「そうか……どうなんだ？」
メアの指摘に引き戻され、ベルゼは鋭い眼光を受付嬢に向け直した。
受付嬢は居心地悪そうに身を縮め、言いづらそうに小さく頷く。
「そうですね……そう思われるのも、当然です」
メアは机の木目をトントンと指先で軽く叩きながら、さらに追い討ちをかけた。
「だいたいさ、密偵がすでに潜入して宝物庫の場所まで突き止めてるなら、その密偵自身が鑑定書をさっさと奪ってきちゃえば済む話なんだよね。それが出来ずに、こうしてわざわざ外部の冒険者に話が回ってくるってことは……ねぇ？」
核心を突かれた受付嬢は、肩を落として小さく息を吐いた。
そして部屋の扉をちらりと確認し、両手を胸の前でぎゅっと組む。
「……こちらは完全に内密なお話ですので、決して他言されないようにお

願いいたします」
　重々しい前置きをしてから、受付嬢は声を潜めて語り始めた。
「実は、その密偵の方は女性でした。潜入や情報収集の実力も申し分ない方で、屋敷の使用人に紛れてうまく入り込んでいたのですが……どうやら、途中で潜入がバレてしまったようなのです。連絡用の通信魔具から、女たちの嘲笑うような声とともに……その、密偵の方が何度も激しく絶頂させられているあられもない声が、報告として届けられまして……以降、完全に音信不通になってしまわれました」
「なっ……」
　ベルゼは思わず息を呑んだ。
　単に捕らえられて地下牢に放り込まれたのではない。快楽によって理性を叩き折られ、無力化されたのだと嫌でも察しがついた。悪徳貴族の屋敷の奥底で何が行われているのか、想像するだけで背筋に冷たい汗が伝う。
「その声が届いたということは、敵は通信魔具の存在に気づいている……

通常、通信手段など真っ先に破壊するものだが、それを敢えて繋いだまま醜態を晒させるとは……見せしめか？　あるいは、次の侵入者を誘い込むための罠では？」

ベルゼの指摘に、受付嬢は小さく息を呑んでたじろぐ。

だが、その疑念を横からあっけらかんと切り捨てたのはメアだった。

「わざと聞かせてギルドを挑発してるか、あるいは『誰が来ても同じように啼かせてやる』って、よっぽど手口に自信と余裕があるんじゃない？」

「余裕……か」

メアはどこか面白がるように喉を鳴らし、納得顔で唇を吊り上げた。

「なるほどねぇ。そういうリスクも込みでこのお値段ってわけか。ふふっ、それがあるなら納得かな」

危険の正体が「それ」であるなら、むしろサキュバスにとっては専門分野とすら言えるのかもしれない。

だが、ベルゼにとっては別の意味で警戒度が一気に跳ね上がる情報だっ

た。

金貨百五十枚という甘美な果実と、女を快楽責めで屈服させる悪徳貴族の罠。

メアが視線を向けてくる。

その視線には、「どうするの？」という問いが含まれていた。

密室の静寂の中、金貨の魔力とマイホームの幻影が、ベルゼの信念の足元を揺さぶってくる。

「だ、だが……いくら大義名分があろうと、夜陰に乗じて他人の屋敷へ忍び込むなど、正々堂々たる武人の道に反するのではないか？　隠密や盗人のような真似など、私の剣の誇りが……」

腕を組み、額の金属バンドの下にある角が疼くのを堪えながら、ベルゼは頑なに眉根を寄せる。だが、隣に立つ相棒は、最初からその拒絶など織り込み済みとばかりに、気だるげな笑みを浮かべていた。

「えー？　盗みじゃなくて、悪徳貴族の不正を暴く正義のお仕事だよ？

それにさぁ……ベル、あの丘の上の日当たりのいいお家、もう諦めちゃうの？　手入れした剣を並べる部屋、欲しかったんじゃないの？」

「うぐっ……そ、それはそうだが……しかし……」

痛いところを突かれ、ベルゼの碧眼が激しく揺らぐ。あの日当たりの良い広い庭、誰の目も気にせず素振りのできる静寂。それらが金貨の輝きとともに脳裏をかすめ、高潔な理性の足元を容赦なく削り取っていく。

そこへ、対面に座っていた受付嬢までもが、潤んだ瞳を熱っぽく細めて身を乗り出してきた。

「お、お願いです……！　ギルドとしても、この不正はどうしても暴きたいんです。お二人……特に、メアさんに……お願いしたくて……っ」

「特にお前に、って言われてるぞ、メア」

「ふふ、信頼されてるねぇ」

メアの問いかけに、ベルゼは再び深い思案の泥沼へと沈み込んだ。

悪を討つのは武人の務めだ。だが、夜這いじみた潜入は……いや、しか

し相手は法網を潜る悪徳貴族。毒には毒を、奇襲には奇襲を以て制するのも、兵法の一端と言えなくはないのではないか……？

ぶつぶつと唇を動かし、眉間に深い皺を刻んで自問自答を繰り返すベルゼ。

そんな横顔を横目に、メアは小さくため息を漏らすと、だぼついた黒い袖をゆらりと揺らした。

「……はぁ。ベルが悩んでる間、時間もったいないし。私たち、始めていようか」

「え……？　は、始めるって、何を――んむっ!?」

ベルゼが視線を向けると、目を瞬かせた受付嬢の唇をメアが正面から躊躇なく塞いだところだった。

ちゅぷ、と密室の静寂に響く、艶めかしく濡れた音。

受付嬢の栗色の髪がふわりと揺れ、丸眼鏡を外された瞳が驚愕に見開かれる。だが、サキュバスの芳醇な魔力を帯びた舌先が割って入った瞬間、

抵抗の吐息はあっけなく甘い鼻濁音へと溶け崩れていった。
「……なぁ、メア。その屋敷の地下宝物庫だが、警備の巡回間隔はどうなっているのだ？　もし私兵に見つかった場合、正当防衛として峰打ちで制圧しても問題はないのだろうか……」
その光景をただ視界に映るものとして流し、ベルゼは至極真面目な顔で独り言のように問いかける。
背後で衣擦れの擦れる音が激しくなり、わずかに唇を離したメアが、灰紫色の瞳をとろんと細めて声をかけてきた。
「ベルー。私達、ちょっと気持ち良くなってるからー」
「ん？　あぁ、そうか」
「べ、ベルゼさんっ……！　た、たすけて……っ、あ、んっ！」
すでに制服の襟元を大きく寛がされ、メアの細い指先が汗ばんだ白い胸元へ這い入っているのを受け止めながら、受付嬢が涙目で縋るような声を上げた。

だが、思考の迷宮に囚われたベルゼは、止めることも咎めることもしない。
「おー、ほどほどにな」
「ちょ、ベルゼさん……っ!?　ひゃうんっ！　や、そこ……指先で、転がさ……っ！」
「……ふふ、お姉さん、ここすっごく硬くなってるよ？　朝にあれだけ啼かされたのに、もうこんなに尖らせちゃってさぁ……」
「ち、ちが……っ！　め、メアさんが……急に、そんなところ……っ、あぁっ！」
相談室の隅で繰り広げられる、生々しい愛撫と吐息の波。
しかし、ベルゼの頭の中は依然として「武人の矜持」と「金貨百五十枚」の天秤で埋め尽くされていた。
「……おい、受付嬢。ひとつ確認したいのだが」
「は、ひぃっ……!?　な、なん、でしょうか……っ！　んくっ、指が、奥

に……っ！」

「その【鑑定書】とやらは、宝物庫のどのあたりに保管されている？　探すのに手間取って無駄な時間をかけるのは避けたいのだが」

「ず、図面の……っ、ひぁっ!?　お、奥の……飾り棚の……っ、隠し引き出し、ですぅっ……！　あっ、メアさんっ、だめ、そこ……爪先で、カリカリ引っ張ら……っ！」

「へぇ……隠し引き出しねぇ。お姉さん、声震えすぎて何を言ってるか聞き取りづらいよ？　ほら、もっと腰浮かせなよ、スカートの中、もうぐしょぐしょじゃない」

「言わないでぇっ……！　んあぁっ、また……っ、頭が、じんじんして……っ！」

じゅぷり、と下着の隙間から漏れ出す蜜の音が響いてくる。

ベルゼは顎に手を当て、至極真面目な顔で頷いた。

「なるほど、奥の飾り棚の隠し引き出しだな……では、罠の類はどうだ？

魔導式の警報や、物理的な落とし穴の有無は把握しているのか？」
「け、警報は……っ、んぎゅっ……！　扉の鍵穴に……っ、簡単なものが……っ！　で、でも……っ、一般的な……あんっ……ものなので……っ、メアさんの影術ですり抜けられる、はず、で……ふぁあぁあっ!?」
「影潜りね。了解ー……ねぇお姉さん、身体ぎゅうぎゅう引き攣らせて、もう我慢の限界なんじゃない？　声、我慢しなくていいよ？」
「む、り……っ、そんな……っ！　ベルゼさんの前で……っ、あ、あぁぁーーっ！」
ビクンッと受付嬢の背筋が弓なりに反り、椅子の背もたれに後頭部を押し当てて激しく痙攣した。
相談室の空気が、むせ返るような女の熱気と甘い香りで淫らに淀んでいく。
その絶頂の余韻で荒い肩呼吸を繰り返す受付嬢の姿を見ても、ベルゼはなお、自らの胸中で最後の言い訳を必死に組み立てていた。

（……悪徳貴族を懲らしめ、不当に搾取された正義を取り戻すため……そう……これは卑劣な侵入などではない。悪党に法の鉄槌を下すための、いわば【正義の執行】の一環……！　そうだ、悪を挫くのもまた、武人の務めの範疇ではないか……！）

ぐるぐると巡る自己欺瞞の末、ベルゼはカッと顔を耳の裏まで真っ赤に染め上げながら、拳を机にドンと叩きつけた。

「……よ、よし！　決めたぞ！　悪党を成敗し、ギルドの治安を守るためならば、その特命任務を謹んで引き受けてやろうではないか！」

凛々しく、高らかに宣言してみせたベルゼ。

だが、その目の前では――メアが指先についた透明な雫をぺろりと艶っぽく舐め上げ、受付嬢はだらしなく制服を乱したまま、白目を剥きかけてぐったりと背もたれにもたれかかっていた。

力なく大股に投げ出された両脚の間からは、激しい絶頂の熱に浮かされた証である蜜が溢れ、白い太ももを濡らしながら静かに伝い落ちていた。

「……おー、決まったねぇ、ベル」
「……あ、あの……ありがとうございますぅ……っ」
二人のあまりにも気の抜けた、そして生々しすぎる返事に、ベルゼは振り上げた拳のやり場を失い、羞恥と気まずさで一人その場に立ち尽くすしかなかった。
赤面して視線を激しく彷徨わせながら、ベルゼは頭痛をこらえるように額に手を当てる。
「……礼はいいから、ちょっとは隠せ。丸見えだぞ」

数日後。

夜の帳がすっかり降り、街の喧騒が遠い波音のように引いていく。
街の東部、貴族街の一角にそびえる豪壮な屋敷は、昼間の華やかさを脱ぎ捨て、青白い月光の下で底知れぬ巨獣のように冷たく沈黙していた。
その高く聳え立つ外壁の影に、二つの輪郭が音もなく張り付いている。
ベルゼは背負った大剣の金具が触れ合わぬよう手袋越しに押さえ、額の金属バンドの下、わずかに疼く角の感覚を神経質に意識する。
「……いいか、メア。くれぐれも騒ぎを起こすなよ」
ベルゼは微かな唇の動きだけで、隣の影へ向けて囁きかけた。
「目的はあくまで、あの不正の証拠たる【鑑定書】の奪取だ。警備兵との無駄な衝突は避ける。証拠だけを速やかに手に入れ……正々堂々と立ち去るぞ」
「はいはい」
返ってきたのは相変わらず緊張感の欠片もない、気だるげな返事だった。
メアはフードを目深に被り、瞳をわずかに細めてベルゼの横顔を見上げ

ている。
「泥棒しに来てるのに『正々堂々立ち去る』って、ベルのその生真面目な語彙、本当に面白いよねぇ」
「泥棒ではないと言っているだろうが！　これは悪徳貴族を裁くための、正義の鉄槌の一環だ」
「はいはい、正義の鉄槌ね……ほら、巡回が来るよ」
メアの指先がベルゼの裾を引く。
直後、角を曲がってきた二人の私兵の足音が、規則正しく石畳を叩いた。手に掲げられた魔導ランタンの淡い橙色の光が、外壁のレンガを舐めるように滑っていく。
ベルゼは息を止め、身体を壁の凹凸へと沈み込ませた。
かつて戦場を駆けた武人としての身体操作は寸分の狂いもない。だが、その隣でメアが見せた所作は、人ならざる怪異そのものだった。
薄い黒衣がふわりと揺れたかと思うと、メアの小柄な輪郭が、足元の影

の中へとずるりと溶け込むように沈み込んでいく。光が掠める寸前、そこにはただの黒い染みしか残されていなかった。

（……相変わらず、気味の悪い術を使うやつだ）

背中を撫でる冷や汗を拭う暇もなく、巡回の足音が遠ざかる。

影の中からするりと実体を取り戻したメアが、音もなく手招きをした。指し示す先は、屋敷の基礎部分――植え込みの深い闇に隠された、地下宝物庫の空気抜きとおぼしき鉄格子の通気口だ。

「鍵、外れてるよ。密偵さんの報告、正確だったね」

「あぁ……潜入が露見して捕まったと聞いていたが、あらかじめ残してくれた情報に偽りはなかったようだな」

「この侵入経路の情報は漏らさなかったんだ。ふぅん」

「そこは流石と言うべきだろうな。職務への誇りがあった証拠だ……捕まってしまったことは気の毒だが」

ベルゼが小さく息を漏らすと、メアは鉄格子に細い指を滑らせながら、

くすくすと面白がるように唇の端を吊り上げた。
「ふふっ、どんな攻め方をされたのかなぁ？　激しく啼かされちゃうくらいだし、よっぽど淫らな拷問だったのかなって……そこがすっごく気になっちゃう」
「今はそんなことを気にしている場合か。余計な想像をするな……行くぞ」
くだらない詮索を鋭く一刀両断し、ベルゼは小さく首を振って雑念を振り払った。
細工を外した鉄格子を静かに引き抜くと、そこには地下深くへと続く、カビと冷えた魔導の気配が澱む暗黒の縦穴がぽっかりと口を開けていた。
「先に行くよ、ベル。足元、気をつけてね」
メアが黒衣を翻し、小柄な身体を活かして躊躇なく闇の中へと滑り込んでいく。
ベルゼは背中の大剣の位置を確かめ、深く、静かに息を吸い込んだ。
（……後戻りは、できんぞ）

自らに言い聞かせるように奥歯を噛み締めると、ベルゼは長身を屈め、相棒の消えた冷たい闇の底へと、音もなく身を投じた。

吹き抜ける地下の冷気が、これから待ち受けるであろう予期せぬ罠と波乱を予感させるように、彼女の白い首筋をひやりと撫でていった。